

Title	«Parole»の表現法
Author(s)	赤木, 富美子
Citation	大阪外国語大学学報. 52 p.1-p.17
Issue Date	1981-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80829
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

《Parole》の表現法

赤 木 富 美 子

Paroles dans les romans —*La Princesse de Clèves*—

Fumiko Akagi

Bien des chercheurs ont déjà remarqué l'importance du discours indirect, au point de vue stylistique, dans *la Princesse de Clèves*. Mais le discours direct n'est pas moins important quand on s'aperçoit dans ce roman d'une défiance de la relation entre les hommes et de leurs paroles.

En examinant le destinataire et le destinataire de chaque discours direct, le sujet de ces discours, le nombre des discours de chaque personnage..., nous avons essayé de trouver les principes sur lesquels se fondaient les fonctions du discours direct de cet ouvrage.

Par exemple, du fait que les discours directs de l'héroïne sont trop peu nombreux et qu'elle garde le plus souvent un silence profond, nous avons considéré comme un principe que pour cet personnage les paroles qui ne sont pas dites sont plus révélatrices que celles prononcées.

Cette fonction paradoxale du discours direct se trouve aussi dans les autres exemples que nous avons analysés et elle dénote toujours une idée désespérante de l'auteur sur les relations et la communication entre les hommes et sa défiance profonde des paroles

「クレヴの奥方」は、フランス文学の伝統の1つとなった心理分析小説の始祖とされており、最も新しい研究書に至るまでその指摘から文章を始めている。Jean Fabre は、1970年、*L'art de l'analyse dans la Princesse de Clèves* の冒頭で『クレヴの奥方』から初めて、フランス小説の特徴を論じるのが批評の伝統だ⁽¹⁾と述べているし、Alain Niderst は、『クレヴの奥方』の神話が存在している。これは完全に近い最初のフランス小説と見なされ、分析の芸術の象徴とされている⁽²⁾と1977年その序論をはじめている。Francillon の「典型的にフランス風の最初の分析小説」⁽³⁾という言葉は簡潔にこの小説の地位を示すものであろう。無論この小説が分析にすぐれ、後代の有名な小説家たちの手本になったことは、その研究価値を保証するとしても、一方作品そのものに対する批評、研究も無数で、《Rien de neuf à en dire》⁽⁴⁾と断定した Gide

以後も、婉々と後をたたず、《Encore la Princesse de la Clèves!》⁽⁵⁾といった感想を与えることも事実である。

だが何世紀にもわたって人々に愛読され、影響を与えたような芸術作品は、その中に未知の鉱石を無限に含んでいて、一寸視点をかえて近ずくと、全く思いがけない問題を提供してくれるという特色を持っている。クレヴ夫人が自分の恋を夫に告白したことは是か非かといった問題が、いまだに Genette の興味をひき、vraisemblance と motivation についての考察⁽⁶⁾のきっかけをつくったり、Francillon⁽⁷⁾が心理分析作品としてのその構造について研究を発表したりしているのもその現われであろう。この小説を解明しつくしたと信じている従来の批評に向って Michel Butor が、《On nous trompe sur *La Princesse de Clèves*》⁽⁸⁾というショッキングな言葉で、挑戦したのも、Jean Rousset が、この古典的作品と、17世紀の批評を、「一寸特別なやり方で」⁽⁹⁾とりあげたのも、或は、Pierre Malardain による歴史叙述部分の新しい解釈⁽¹⁰⁾もこの小説の与える深い可能性の証明であろう。

これらの鉱石探したちを力に、この小論では、今まで余り問題にされなかった、小説の会話部分、特に直接話法に関して与えられた重要な働きとその理由に注目してみたいと思う。心理分析や告白場面の劇的効果だけがこの作品の魅力でないことを結果が示してくれれば幸である。また同時代の小説における会話部分との比較も必要な作業であるが、直接話法の研究は大変おくれていて、簡単に参照するというわけにいかない。例えば、Mme de Villedieu に関してさえ最近大著を著わした Micheline Cuénin⁽¹¹⁾によって重要性を指摘されただけで、まだ手をつけられていない。かなりの紙数を予定して次の機会にゆずるほかないようである。texte は、Emile Magne による Textes Littéraires Français 版、Madame de La Fayette, *La Princesse de Clèves* を使用する。

I 「クレヴの奥方」における会話表現の種類

さて、この作品の会話表現の形は、次の4種類に分類できる。

1) 当時の *histoire* の形式から継承されたとされる *récit intercalé*——登場人物の一人が長い物語をする形の会話

2) 同じく当時の小説に頻繁に用いられた *monologue*

3) 作中人物の言ったことの内容を、作者の言葉になおして伝えられた会話(間接話法による会話はここに含まれる)⁽¹²⁾

4) 作中人物のこぼをそのまま——の印で伝える表現方法(=直接話法)による会話

なお自由間接話法については、論議があるが、この小説には存在しないという説が有力なようである。存在したとしても、例えば、Claudette Delhez-Sarlet のあげているのはわずか4ヶ所であるから、⁽¹³⁾小論では軽視することができるだろう。

このうち、1) は、普通の意味で会話とは言えない。むしろ作者の視点を作中人物に肩代りさせて、しかも事件の主人公以外の人物に語らせることによって、より多くの客観性を持たせた narration の一部分と考えられる。Lafayette 夫人のこの手法は、nouveaux romanciers たちが排除しようと苦心している、作者の介入の問題を巧みに解決したものとして高く評価されている。この部分の大きなテーマの1つである歴史上の事件について、小説の構造上の新しい意味を見出そうとする研究⁽¹⁴⁾もあるが、Francillon や Nidert に従い、挿入された語りとして扱い、今回の検討からは一応省くことにする。

次に2) の monologue であるが、当時の小説に比べて、ラファイエット夫人は、その量を著しく減少させている。それは主人公の2人に限られており、クレヴの奥方のもの2回、Nemours 公3回にすぎない。この箇所の劇的効果は否めないが、Francillon の言うようにやや古い小説技法の残りとも考えられ、⁽¹⁵⁾むしろ少いことがこの作品の特徴とも見なされよう。

恐らく普通の意味での会話を考える上で重要なのは、残る2つの方法、3) 地の文に組みこまれた会話と、4) 直接話法であろう。小論の目的である4)の部分の働きを明らかにするため、最初は、3)の部分の、この小説における働きを考察してみることにする。

II 間接話法部分の検討

まず一見して気付くことは、この作品は、直接話法に比べて、間接話法が圧倒的に多いことである。行数を数えることは余り意味がないように思われるので、発信者と受信者がいて、その間にメッセージが伝達される場合を1つの単位として、比較してみると、直接話法によって話された「ことば」がそのまま表現されている場合48に対して、内容が要約伝達される表現は、その1倍半以上の70に相当する。当時の小説、特に *Clélie* などにおける多量の conversations, discussions を考え合わせると、ここにこの小説の特徴を指摘するのは正しい。Francillon は、この間接文体が、人物の饒舌を内化し、地の文にとりこむことによって、人物の言葉と思考を同じ手法で背後から描く作者の存在を自然なものにしていると評価⁽¹⁶⁾、J. Fabre は、これが人物の意識の plan における出来事と、表現されたことの plan の出来事とを同質に扱い、同じ比重を与えることを可能にしたと指摘している。⁽¹⁷⁾ Jean Rousset も、《la narratrice modifie par moment la perspective et fait passer son lecteur de l'intérieur à l'extérieur, du coeur au comportement》⁽¹⁸⁾と言う言葉で同じ特徴に気付いている。

典型的な例をあげてみよう。クレヴの奥方とヌムール公が、互に相手の名を知らずに踊るという偶然の後で、奥方に恋していた Guise の若殿が思ったことと言ったこととの描写である。彼はその偶然を、ヌムール公が奥方を恋するようになる運命の予兆と感じた。事実、奥方の顔に心の乱れが浮かんできたのか、若殿の嫉妬が現実をこえたところまでを見せたのか、彼には奥方が公を見て心を動かしたように思われ、それを奥方に言わずにはいられなかった。《Il crut qu'elle

avait été touchée de la veue de ce prince et il ne put s'empescher de lui dire que M. de Nemours estoit bien heureux de commencer à estre connu d'elle par une aventure qui avoit quelque chose de galant et d'extraordinaire.》(p. 37).

Il crut que の次の文章と、dire que の次の文章とは、全く同じ調子で、少しの不連続も感じられない。いかにも Francillon の言う通り、思考の plan と言葉の plan が同列におかれているといえることができる。

だがその同質性は、思考の plan を、会話の描写と同じ程度に具体化し、《 》に入れて音声化した Flaubert の場合と異なり、逆に会話の言葉からその具体的な形と音声を全くとり去って、思考の plan の曖昧さ（といって悪ければ抽象性）にまでひき下げることによって得られたものである。先の例を用いて詳しく言うと、思考と会話とを同質にするには、もう1つの方法が可能である。即ち、若殿の思考内容を意識に浮んだ言葉の形で会話符号で囲み、《Elle a été touchée...》crut-il と描写し、次の dire que の内容も言われたままの形にして《 》に入れる方法であるが、作者はこの方法を全篇を通じて一度もとっていない。先に見たようにむしろ屢々会話の内容を要約して従属文で表現するのである。これを会話の方から言うと、作者は「ことば」がどんな形で言われたか、どんな印象を与える音を持っていたかを全く無視しており、parole の描写の持ち得る重要な特性を著しく減じてしまったということになる。

この態度は、作者の会話部分の描写一般について見出されることで、次の例は更にこのことをよく示しているであろう。ここでは確に人物間に会話があったにも拘らず、文法で言う間接話法さえ用いられていない。前述の例に続く箇所であるが、ギーズの若殿に指摘された後、クレヴの奥方は帰宅して舞踏会での出来事を母に報告する。《Elle lui loua M. de Nemours avec un certain air qui donna à Mme de Chartres la mesme pensée qu'avoit eue le Chevalier de Guise》(p. 37)

確に母の考えたことは、奥方のほめ言葉と同質にうまくとけあっていて読者は2つの plans を異和感なく進む。しかし会話の面から言うと、louer avec un certain air とは、何と漠然とした表現だろう。これは会話の持つ形や音の一切を、空気の流れのようなものにかえ、そのメッセージの本質だけを重視したものと言う他ない。思考の部分さえも、会話の形にして、《 》で囲んだ場合の同質化と、全く逆の手法だと言うべきである。決して具体的な音を連想させることのない思考部分と同じ抽象性が、会話があったという報告をも被っているのである。そこから、読者にとっては、緩かにくり展げられる絵巻のような文体が浮かび上る。実際作者は、ある作中人物が、他の作中人物に、これこれの意図を伝えたと報らせる時、それに用いられた会話の語の形や音に、何の重要性も認めていないように見える。dire や avouer や répondre と言った導入句を持つ間接話法以外に、作者はそこにも至らぬ曖昧な言葉、faire voir や témoigner を頻繁に用いている。皇太子妃が Chartres 姫のために協力することを喜び、《elle le témoigna au Vidame, et l'assura que, quoy qu'elle sçeust bien qu'elle feroit une chose désagréable au

Cardinal de Lorraine, son oncle, elle passeroit avec joye par-dessus cette considération parce que...》と理由が説明される箇所も、確に皇太子の言葉はあったにちがいないが、彼女が assurer した内容は、とても17才の美しい女性の言葉とは思えない無駄のない理詰めの要約である。

このような形式で読者に伝えることは、発言者（作中人物）が会話を用いて話し、その結果また受信者（作中人物）が会話を用いて意図を現わしてゆく動きなのであるが、用いられた会話の形は、全く無視されているといってよいのである。人々は、ゴブラン織りの中の人物たちのように、囁きかわしている。その声は外にはひびかない。そして先に数字をあげた如く、このような文体でかかれた部分が、明らかに会話のことばが想像される箇所だけでも、直接話法の部分の1倍半以上存在しているのである。つまり作中人物の会話の大きな部分が、このような扱いを受けているのである。

ところでこのような会話の扱い方、表現形式を生み出した理由を想定してみることができるだろうか？先にあげた Jean Fahre は、この人物の心の中と、その会話との《fondu》⁽¹⁰⁾を指摘した際その理由として、《Le vie intérieure paraît tellement plus importante et plus réelle que l'autre》(p. 45) と言っている。Jear Rousset も作品全体について同様の捉え方をし、《C'est l'envers, le secret, l'existence invisible des passions, leurs mouvements intimes qui nous semblent seuls vrais et seuls dignes d'attention》⁽²⁰⁾と述べている。作品全体についてのこの基本解釈には、結論で反論することになるだろうが、問題を会話の表現だけに限ってもこれらの理由は肯定し難いように思われる。先に見たように、内と外の同質化は、思考の部分が重視されたことによって起ったと言うよりも、会話の具体的な形や音を軽視したために起ったと言い得るのであり、作者が人物の内面だけに視点を凝結させた結果の文体であると言い難いのである。

ところで、それならばこの会話の扱いは、内面の重視といった別な方向に理由を求められるべきでなく、会話そのものに対する観念の中に求められるべきなのではないのか。会話というものの対しての、後代とは違った考え方を示しているのではないだろうか。ここでは会話は、先ず、そのきらびやかな形式を殆んど無視され、内容の要約に還元されている。しかもその内容が何らかの意味で影響を与えた場合にのみ要約紹介されているのである。人間の会話は余りにも空疎で、一語一語をひき写すにも及ばない。そして、会話の中で話されたことが何らかの行為をなし得た場合にしか、叙述される価値がないかの如くである。

作中人物や、小説の進行に何の影響もない会話でも、それ自身面白かったり、性格や訛の描写になっているといった反対の場合を想定すればわかることだが、この小説で重要なのは会話の行う働きであって、その形ではない。先に見たように、間接話法より更に抽象的な表現が数多く見出されるのもそのためであろう。そして多分この作者の生きた世界では、会話の1語1語は、余りに装飾的で、余りに様々の無駄な要素を含んでおり、その不要の語の氾濫をくぐりぬけて、主要な意味が捉えられ、その波紋がまた多量の光の浮氷をくぐって、拡がってゆくのであろう。このような場合に、会話の具体的な語の1つ1つを写実することは、全く意味がない。

《Il (Roi) luy fis paroître qu' il ne l' (ce mariage) aprouvoit pas》(p. 27) は、その最も極端な例であろう。Henri II が Valentinois 公妃の策謀にのって、シャルトル姫と Montpensier 公との結婚に反対する箇所であるが、ここには王の言葉の意味するところの重大さと同時に、語の 1 つ 1 つの形の完全な軽視がある。王の言葉ひとつで、母夫人の努力は水泡に帰し、娘のために希望していた結婚の夢は打砕かれたのであるが、また一方王は、露骨に non を言われたかどうか不明である。用いられた語は、怖らく不要な修飾を伴って一見好意に溢れていたかも知れない。それに伴うまなざし、状況と語の関係、その他無数の要素を含んで、真の意味は伝えられるのである。時には会話の言葉とは全く反対の意味を持つこともあるであろう。奥方の母は、宮廷にデビューしたばかりの娘にこの世界でのものの見方を次のように教えている。王妃が、《mon comère》と親しく呼んでいる人物に抱いている飽くなく憎悪を知って娘が驚くと、《Si vous jngez sur les apparences de ce lieu-cy, vous serez souvent trompée》と母君は言うのである (p. 40)

この印象的な一句は、凡ての研究者が目をとめるところである。⁽²¹⁾だがその appearance を構成するものは、まなざしであり、表情であり、そして何よりも人々の会話であることを忘れてはならない。人々は言葉の appearance の嘘を通り抜けて、その意味するところへ辿りつく。このような会話のやり方になれた作者と読者にとって、特に重要でない限り、会話の具体的な総体を記述して伝達することは、煩瑣にだけだということは、容易に推察できる。

こうして、作品の会話の表現形式は、会話そのものに対する作者の基本的な考察に由来するものであり、作品全体の基調と会話との密接な関係も想定することができるようである。

では、それにも拘らず、作者が会話を、具体的な形で、つまり直接話法で表現しようとしている場合は、何と考えればよいのであろうか？ そこには、何か別の理由が存在しなくてはならないことになる。

Francillon は、この小説における間接話法を重く見て、作者が顔を出す地の文の部分こそ、心理分析の坩堝を構成しており、そこにこそこの小説の主要部分が存在していると述べている。⁽²²⁾それでは直接話法の部分は、Mme de Villedieu の小説について指摘されるように、⁽²³⁾単なる変化の面白さをねらった技巧上の意味しかないのだろうか？ この作品では、直接話法の部分には、もっと別な機能があり、その部分は、間接話法で述べられた会話よりも、ずっと重要な意味を与えられているのではないだろうか？ 次章では、直接話法で表現された会話を分析し、その意味を考えてみる。

Ⅲ 直接話法部分の検討

まず、考察の手がかりとなるような、数の検討から始めよう。先に間接話法などの部分について行ったように、発信者、受信者、メッセージをひと組として、直接話法による会話を枚挙してみると、約48ヶ所見出すことができる。そして、第4章がやや少いことを除けば、各章に平均し

て分配されていることがわかる。第4章がやや少いのは、会話を量によってはからなかったからである。この章には、小説の最後を飾る、奥方とヌムール公との長い対話の場面があり、回数は少ないが、全篇を通じて直接話法による会話部分は、均等に配分されていると言える。古典主義時代の均衡の趣味とともれるが、結果的には、直接話法は物語りの全体を縫っていつも適当な間隔で現われてくる。従って絶えざる動きを齎すものとして軽視できない存在だと言える。

その1つ1つの発信と受信について見ると、先ず主人公の奥方が発信者として参加しているものが著しく少いことが目をひく。全体で18ヶ所にすぎず、しかも物語が進行するにつれて奥方の発言が増加しており、前半（Ⅰ、Ⅱ章）合わせて7、に対して、後半（Ⅲ、Ⅳ章）に11となっている。このことは、数字に頼るまでもなく、研究者の殆んどが気づいていることである。Frarcillon は、この女主人公の態度を、《silence révérateur》⁽²⁴⁾という言葉で表現しており、《elle est à l'écoute》⁽²⁴⁾とつけ加えている。実際、奥方がききき手になっている場所を数えると、22ヶ所あり、女主人公にふさわしい数にのぼる。しかもその中15ヶ所が前半に集中している。この女主人公は物語の前半では、殆んど会話に参加せず、じっと人の話をきいていたという人物像が浮び上るのである。以上の発信、受信の両方を合わせると、実に40ヶ所について彼女は直接話法で表現された会話に立あっているということになる。このことを、間接話法などと表現された会話部分と比較してみても、大体同様な結果が出る（発信17、受信27）。但この話法の総計は、直接話法の総計よりずっと多量なので、奥方が立合う比率は、幾とずっと少くなっている。このことは、直接話法が主人公に集中していることを示している。夫のクレヴ公の発言は全体で11と少い（受信のみというのではない）が、この中の9が、後半で奥方の告白をきいた後に集中している。これは母夫人の死後、夫の影響力がそれに代わるという小説の筋に対応するものである。間接話法との間にも余り開きはない、発信70、受信70）。意外なのは恋の相手、ヌムール公である。公の発言は、48のうち12と少く、前半6、後半6、と平均している。これは、全篇を通じて、彼が主人公の一人であり乍ら、あまり発言しないということを示すものである。それでは、間接話法で彼の言葉は表現されているであろうか？ ところがこれはますます少く、70のうち、わずか9ヶ所しか発言していないのである。つまりヌムール公の発言は余り多くないが、話す時には殆んどが直接話法で表現されているという結果がでる。このことは、かなり検討の材料を提供してくれる。第1章で考察したように、間接話法などによる表現が、会話の1語1語の音を無視したものとすれば、ヌムール公の発言は逆に、どんな形で言われたのか、どんな風に言われたのかを重要視して表現されていることになる。ヌムール公はこの小説第一の主人公ではないが、その発言は、女主人公以上に大切にとり扱われており、大きな位置を占めているのである。この小説に初めて現われる直接話法が、ヌムール公の発言であることも、以上の結果を傍証することになるだろう。しかも冒頭部分のこの言葉は、25頁にわたる長い地の文の中に、そこだけばつんと直接話法で浮び上っており、全体の調和を乱しているとも言えるし、内容から言えば、間接話法で充分表現できる言葉である。すなわち、(英国女王との結婚を王に奨められて)、

《M. de Nemours crut d'abord que le Roy ne luy parloit pas sérieusement, mais comme il vid le contraire:

—Au moins, Sire, luy dit-il, si je m'embarque... (p. 16)

英国女王との結婚の可能性は、公の資質を輝かしく印象づける方法の一つであり、また将来奥方の心を悩ませる問題の一つであり、更に公がその野心を恋の犠牲にすることによって奥方への想の強さを計量させる方法の最も大きなものであろう。その部分に、全体の調和を破ってまで、直接話法をおいたという事実は、作者がヌムール公に与えた特権的な小説上の地位と同時に、直接話法に期待した同じ強い効果を証明している。因みにこの言葉に続く半頁で、旅行という公の不在が形成され（これは、当時の小説によく用いられた手法）、女主人公の初登場の叙述へとつづく。

だがそれにしても、小説全体におけるヌムール公の発言の回数は、読書の際の印象よりも遙に少いと言わなければならない。この *silence* の意味は、後章にゆずることにして、まず、発言がこれほど少いの、何故、公の印象が強いのかを考えてみたい。それは、全体の会話のメッセージの内容を調べてみると明らかになることである。48の直接話法で表現された会話のメッセージを分類すると、実にその中の半数近く、20までがヌムール公の噂で占められているのである。つまりヌムール公は、自ら発言する時は、その1語1語を重視した具体的な形で表現され、そうでない場合も、他人の具体的な表現の話法の中で、話題となって表現されているということになる。これはクレヴの奥方がメッセージの話題になっている場合を調べてみると、異様に感じられる数字である。何故なら、この女主人公が、直接話法の部分で、人々の話題になるのは、48のうち、わずか2ヶ所にすぎないからである。

そこで因みに、間接話法では、ヌムール公は、どれ位の話題を提供しているかを見てみよう。この場合は、2人が同時に話題になる場合を入れても、ヌムール公70、奥方70と大体似かよった数字で共に少い。間接話法などの会話の、残りの大部分の話題は、2人の主人公以外のことによって占められていることになる。小説そのものが、*mémoire* として書かれ、作者は史実の考証を怠らず、それを筋にくみこんでいる以上、これは当然のことであろう。そこで、物語の背景をなす *épisodique* な人物と、主要な *fiction* の世界の主人公との取扱いを会話の面から見るとはっきりした区別がなされていることになる。作者は前者を地の文におしやり、女主人公には直接話法によって表現される会話に、きき手として立会う機会を特権的に与え、ヌムール公には、その会話のテーマとなる機会をこれまた特別に多く与えたのだということになる。以上の数量による会話のやや意外な結果は、小説そのものの解釈にも新しい見方を提供してくれる筈である。次章では、この事実を手がかりに、その意味するところの解明にとりかかろう。

IV 言われなかった言葉のメッセージ

われわれは先に第Ⅱ章で、間接話法などの検討から、この小説に特徴的な会話の観念—表面に

現わされた人間のことばへの不信—を見出した。ここでは、直接話法部分の働きを中心に論をすすめたい。小説の流れと、直接話法の働きの関連をみてゆくと、やはりこの小説全体を通じて「ことば」に対する特徴的な考え方が、いくつか浮び出してくるようになる。

まず、奥方が女主人公であるにも拘らず、その発言が余りに少いことに関して、次のような *postulat* が想定される。《言葉は、ある事柄について発言されるよりも、言われないことによって、より多くの意味を持つ。》というものである。例えば、奥方は、第一章で、ヌムール公に愛されていることを知るが、前回ギーズ公の場合のように母に話す気になれない。《*Elle ne se trouva pas la mesme disposition à dire à sa mère ce qu'elle pensoit des sentiments de ce Prince qu'elle avoit eue à lui parler de ses autres amants; sans avoir un dessein formé de lui cacher, elle ne lui en parla point.* (p. 46)

ここで奥方自身も気づかないある相違を、母も読者も知るのである。この恋は、Poulet の言うように、全く運命的な《*surprise*》によって始まるのであるが、⁽²⁵⁾その出会いの場はどうだろうか？ 王は二人に共に踊るように命じた後、お互が今踊った相手の名を知らないことに気づかれて、二人共相手が誰なのか知りたくはないかとたずねられる。ヌムール公は、自分が察していることをすぐ述べるが、奥方は自分も見ぬいていることを告白しない。彼女の受けた大きな心の乱れがこれによって読者に示唆される。以下、彼女がきこえぬふりをしたり、わからない顔をしたり、答えなかったりという場면을列挙することもできよう。

《*Mme de Clèves ne faisoit pas semblant d'entendre ce que disoit le prince de Condé; mais elle l'écoutoit avec attention*》(p. 49)《*Mme de Clèves ne répondit rien*》(p. 53)

《*Elle demouroit donc sans répondre, et M. de Nemours se fust apperceu de son silence, dont il n'auroit peut estre pas tiré de mauvais augures*》(p. 77)

《*Mme de Clèves ne répondit que quelques paroles mal arrangées comme si elle n'eust pas eutendu ce que signifioient celle de chevalier de Guise*》(p. 92)

《*Mme de Clèves temoigna par son silence qu' elle estoit prête à l'écouter*》(p. 114)

《*Elle le quitta sans lui répondre*》(p. 135)

《*Mme de Clèves ne pouvant plus soutenir la conversation...*》(p. 142)

《*Mme de Clèves ne fit pas semhlart d'enterdre M de Nemours*》(p. 143)

《*Mme de Clèves entendoit très bien tont ce que disoit ce prince, mais elle n'y répondoit point*》(p. 173)

まだまだ例はつきないが、これで奥方の発言数が少いことの理由がうなずけると思われる。だが沈黙がより深い意味を表現するというこの公理があてはまるのは、奥方だけではない。当の相手ヌムール公についても同じである。《*il trouva qu'après la faute qu'il avoit faite...le mieux qu'il pust faire estoit de luy témoigner un profond respect par son affliction et par son silence*》(p.149) また作者から読者への説明にも屢々同様な考え方がうかがえるようである。例えば、奥

方の告白の後の夫妻の様子は、何度も沈黙によって表現されている。《Ils demeurèrent quelque temps sans se rien dire et se séparèrent sans avoir la force de se parler (p. 136)

このように、人間の会話についての特殊な不信を原則とする以上、この小説には直接話法の部分に比して、解説部分が多くなるのは当然であり、それも否定文による描写が多くなるものも尤もであることがわかる。しかし、こうした言われ^レない言葉を通して、重大な意味を表現するには、その沈黙を補う *signe* が存在していなければならない筈である。それを作者はどんな風に読者に与えているだろうか？

まず最初に気づくことは、作者は、こうした意味の解説を地の文で先に与えようとはしないことである。先の *comme si...* の例のように、作者の説明は、「わかっていきこえぬふりをした」というにとどまる。解説は他の作中人物によって与えられる。

多くの場合、その場にはこの沈黙の意味を本人以上にさとり観察者がいて、いわゆる *Voyeur* の役を果す。読者は作者から説明をきくのではなく、これら第二の人物の目を通して、或は第三の人物と共に、沈黙の深い意味を知る。例えば、先にあげた最初の例を見てみよう。奥方はヌムールの恋に気づきながらそれを母に話さなかった。しかし、《*mais, Mme de Chartres ne le voyoit que trop*》(p. 46) なのであり、しかもその上 《*aussi bien que le penchant que sa fille avoit pour lui*》(p. 47) と、娘自身の気づかない沈黙の原因までを見抜く。

また時には、その第二の人物は、自分は何も知らずに *signe* を読者に与える役を果していることもある。皇太子妃がしばしば負わされる役であるが、冒頭主人公二人の踊った後で、奥方が相手の名を見ぬいていることをかくすと、妃は、《*Vous devinez fort bien, répondit Mme la Dauphine; et il y a mesme quelque chose d'obligeant pour M. de Nemours à ne vouloir pas avouer que vous le connoissez sans l'avoir jamais veu*》(p. 36) と発言する。この無邪気な発言によって、読者は奥方その人も知らない微妙な心の位置を正確に知るための *signe* を与えられる。この小説が、心理分析小説の始めとされながら、主人公の自己分析、自意識は決して *transparent* でなく本人にも捉え得ぬ影の部分を残していることを *Francillon* は指摘しているが、⁽²⁶⁾ このような心の奥深い *opacité* は、これらの *signe* の組合わせによって、微妙に位置づけられているのである。

以上、言葉が、言われ^レないことによって、より大きな機能を果す例をいくつかあげたが、これを言いかえると、言葉の力の極度の縮減と考えることができる。今度は、言われ^レない言葉ではなく言われた言葉という逆の面から、このことを傍証してみよう。すなわち、数少い奥方の発言は、どんなメッセージを相手に与えることができたのだろうか？ 言葉が異常なほどの重要性を持つべき「告白」をとりあげてみよう。この行為（夫以外の人物に対する恋を、夫に言葉によって知らせるという行為）は、特に、当時の風習になかったという点で大きな反響をよび、*Mercure galant* が、その是非をめぐって読者へのアンケートを記載した位であった。現代においても、文学研究家の興味をひく問題を含んでいて、*Genette* は *Valincour* 等さまざまな意見を紹

介した後、自分自身の独特な解釈を示している。彼はまず、この行為が、extravagante だということを認め、とんでもない行為とは何を意味するかを考える。《(Une action est extravagante) lorsque aucune maxime reçue n'en peut rendre compte》⁽²⁷⁾と彼は規定する。この maxime reçue に叶っている時、どんな行為も暗黙の了解のうちに受入れられ、vraisemblable であるとされる。その場合には、作者は一切の理由説明をしないですむ。Genette は、こうした真当らしさを signifié sans signifiant (ibid. p. 77) と呼んでいる。しかしまた、ある作者が革命的にこれに違反し、断呼として説明を拒否している場合があり、その例として Stendhal があげられている。そして告白場面の Mme de Lafayette も《quelque chose de cela》⁽²⁸⁾だと Genette は解釈するのである。この説の示唆するところは大きいと思われる。Genette は、告白という行為そのものを問題にしたのであるけれども、われわれは人間の「ことば」そのものについて、彼の着目を応用することができるだろう。ここで Lafayette 夫人が奥方に与えたことは、言語不信のこの宮廷の世界において、言葉による伝達を前提とした、人間間の信頼関係の回復であったという意味で、Stendhal と同じほど、反社会的な慣習違反を犯したと言えるだろう。奥方は、誠実な langage、内容と形式の一致した langage によって、自分の意志を伝えようとした人物として描かれている。言葉がその意味を正確に現わし、それ以外の意味を持たないことを確信して用いようとした人であり、言語の誠実さが初めて示されたと言うべきだろう。宮廷の世界にそむいて、言葉をそのように用いようとしたこと、ここにこそ奥方の若さと純粋さという特異性、extravagance があるのである。しかし Stendhal とちがって、この vraisemblance 違反は、楽観的な結果を与えられていない。奥方の言葉は正確なメッセージを果すことができなかった。この稀にみるほど誠実な言葉の受信者は、この言葉が表明している決意を信じず、家臣が、しかも中途半端に目撃したことの方を信用した。また不幸にもこの告白が世間にひろがった原因についても、二人はお互に潔白を語る言葉を信じ得ず、《Sans parler》(p. 145) に自らの考にふける。最終場面での奥方の率直な気持の表明さえ、ヌムール公にその全き意味を伝え得なかったと言うべきだろう。言葉は、はっきり相手に向って、表わすだけの意味を伝えようとする時、決してメッセージの役を果し得ない、とさえテキストは言っているようである。表現行為は、余りに飾り立てられ、何かをかくすために用いられすぎたため、率直に意志を伝えるには、全く意味をなさなくなってしまったのである。かえって意志に反してすべり出た言葉の方に、まだしも真実が汲みとれるかのようになり、作者は、《il ne put s'empêcher de dire》(p. 37) といった表現をよく用いている。ありとあらゆる否定、抑制をかいくぐって現われてくる signe が、真実のありかを示すメッセージなのである。

V なされなかった行為のメッセージ

前章では、言われた言葉よりも、ある言葉が言われなかったことによって、より深い真実を伝

えるという原則とその意味を検討した。それによって、第Ⅲ章で提起された、直接話法の数の問題—女主人公の言葉が余りに少いこと—は説明できたと思う。この章では、次の問題、ヌムール公の話題が、直接話法に大変多いこと、を検討したいと思う。

まずその予備段階として、この小説の2人の主人公、奥方とヌムール公の恋が、常に、何かをしないことで表現されていることに注目したい。普通の場合、恋を感じた人間は、その恋を成就すべく積極的な行動をする。例えばクレヴ公は、後に奥方となるシャルトル姫に一目惚れして、名を訊ね、積極的にその人物の噂をし、父の反対をおし切って、その死後、結婚申込みをする、これら一連の動きは、まっすぐな前進の行動である。ギーズの若殿もまた、奥方に恋していることを常に表明している (p. 37, p. 92)。だが奥方が、ヌムール公と初めて踊って心を動かされたことの最初の現われは、相手を知らないふりをするのであったし、最初の恋の行動は、ヌムール公の望まない舞踏会へ行かないことのであった。第Ⅳ章の言語の例にならって、公理を作成するならば、「何かをするよりも、何かをしないことの中に、深い真実が現われる」と言うこともできるだろう。このような女主人公に対して、ヌムール公の恋も、一対をなしている。彼はこの恋に捉えられてから、曾ての数多い恋人たちへの《le goût et mesme le souvenir》も失ってしまい、《Il ne prit pas seulement le soin de chercher des prétextes pour rompre avec elles》(p. 46) という状態である。皇太子妃への関心もうすれ、《Son impatience pour le voyage d'Angleterre commença mesme à se ralentir et il ne pressa plus avec tant d'ardent les choses qui estoient nécessaires pour son départ》(p. 46)

小説の終章では、彼は Versailles の華やかな galanterie を離れ、奥方の家の庭を眺めつつ、《絵をかかないで》(p. 182) 過し、誰もいない公園で、何もしないで、もの想いにふける (p. 183)

これらの否定の行動の、最も象徴的なあらわれは、晴れの騎馬試合の場で公のつけている黄色であろう。恋する貴人たちが、凡てその恋人のかざりの色をつける中で、ヌムール公のえらんだ色は、相手が絶対に身につけない色である。(p. 152)

このように、行為によって明らかに意志を表現するのではなく、行わないことの中に、真実があるという原則で物語をすすめる場合、その意味を解き明かすには、どんな方法があるだろうか？ まず作者が人物の心の中を読者に描くという平凡な方法があり、ラファイエット夫人もそのたすけを借りている。しかし、作中人物の積極的な行動を次々と描写する場合とちがって、そのような描写は必ず、作者の著しい介入を招き、多量になると、煩瑣で退屈な解説とならざるを得ないであろう。ラファイエット夫人はこの迷路を、直接話法を用いての会話という素晴らしい手段によって解決した。すなわちこの行われなかった行為は、屢々、第三者の直接話法によって、恋の相手にメッセージされているのである。ヌムール公が、自分の行かない舞踏会に愛する人が出かけるほど辛いことはないといったという噂を奥方はきく（この知識そのものも第三者のメッセージである）。彼女は病気という口実で、St André 元帥の舞踏会を欠席する。欠席したと

いう行為は、ヌムール公には次のような方法で伝わる。翌日、病気であったとも思われぬ奥方の様子を見た皇太子妃が、ヌムール公と母夫人の前で、「ヌムールさんの意見をきいて、元帥に *faveur* を与えないために欠席したのでしょうか」と暴露する。(p. 51) 奥方は余りに正確に言いあてられて赫くなる。これを見て母夫人は、娘の欠席の理由を正しく知るが、ヌムール公に知られないように、病気だったことを強調する。

ここで、ヌムール公の受取るメッセージは三つである。皇太子妃からは、奥方が舞踏会に行かなかったということ、自分の意見を奥方が知っているということ、そしてそれは元帥に *faveur* を与えぬためであるという皇太子妃の誤解。奥方その人からは言葉はなく、顔を赫らめたという記号。母夫人からは、奥方の病気が本当だという証言。この複雑なメッセージの交錯の中で読者は、それぞれの人物の誰が何を知っているかを知ることができる。作者の解説は、その後で二人の主人公の動きをスケッチするだけで充分となる。《M. de Nemours fut bien fâché d'y trouver de l'apparence; néanmoins la rougeur de Mme de Clèves lui fit soupçonner que ce que Mme La Dauphine avoit dit n'estoit pas entièrement éloigné de la vérité》(p. 51) 《Mme de Clèves...以下5行》(ibid)

先に引用したように、この小説における間接話法の重要性は、様々の研究者によって強調されて来たが、直接話法にこのような機能が負わされている以上、この話法の強烈な効果を無視することはできない。第三者の噂となって恋人の否定形の行為のメッセージを受取る時、その言葉は、形の1つ1つが主人公と読者にとって貴重なほど、重さを与えられているということになるだろう。事実、ヌムール公の行わない行為の噂は、実に多数に、直接話法によって齎らされている。

先に引用したように、恋人が自分の行かない舞踏会に行くことを望まないというヌムール公の意見を、奥方が知るのも、皇太子妃とコンデ公の長い噂話であったが、ヌムール公がすっかり変わって今までの恋好きな気質を全く持たなくなったことも、やはり直接話法による噂話で奥方に伝わる。

「—ヌムールさんの噂をしていましたのよ。と皇太子妃は奥方を見るとすぐ言われた。ブリュセルから帰ってから、あの人がどんなに変ったか、驚歎していましたのよ…以下原文10行にわたる噂話」(p. 53)

ヌムールの恋の相手は、皇太子妃ではないかという奥方の疑惑を解くのも、妃自身の直接話法である。

「…確にブリュセルへ行く前は、私を憎からず想っていると覺らせようとなさっていたよね、でも…(原文12行にわたるメッセージ p. 54)

後になって、ヌムール公が遂に英国女王との結婚という野心さえ、顧みなくなったことも、また直接話法の噂話として奥方に伝わる。

「ついで、皇太子妃は奥方に、いろいろ細かいできごとを話された。でも、私が一番話して差

しあげたいことは、と彼女はつけ加えた、ヌムールさんが熱烈な恋をしていて、しかも一番の親友でも打合けられていないばかりか、その女性が誰かさえ見ぬくことができないの、これはもう絶対確かだということよ。」(p. 70) 以下、彼がこの恋のために、どの様に英国女王との結婚計画を断ったか、詳しく、活き活きと、2頁以上にわたって妃の口から噂される。

この恋の相手は自分でないと語る皇太子妃の言葉も直接話法であり、16行を費している。

また噂話が、奥方に強い疑惑を与える形で始まる場合もある。「—ヌムールさんの変られた原因を見抜きたいと私たちが希っているでしょう？ わかったみたいです。そして貴女もびっくりされるようなことよ。あの人は宮廷でも最も美しい方の一人に猛烈に恋をして、またその人から愛されてもいるのですよ。」(p. 138)

夫の死後、パリに隠棲して漸く安息を得ていた奥方の心に、烈しい恋心を蘇らせるのもまた、ヌムール公の噂話である。

「—ヌムールさんといえば、とマルチエグ夫人は言った。…女の人たちとの交際もすっかりお見限りのようです。よくパリに旅行なさっていて、現に今もパリに来ていらっしゃると思いますよ。」(p. 181—182)

以上の例でもわかるように、なされない行為は、噂話に表現される時、まことに活き活きとした印象を与え得る。作者は、噂話を直接話法にすることによって、受信者である奥方の心に、(従って読者に) その1語1語が重く鳴りひびくという効果を期待したものと思われる。何故なら、第一に、噂話にえられたテーマは凡て奥方の心を動揺させるに足る大きなものである。公の多数の色恋沙汰とその放棄、皇太子妃への恋の嫌疑とその解消、英国女王との結婚計画とその放棄といった重要事項は凡てこのメッセージ形式をとっている。第二に、噂によるメッセージを受信した奥方の心を作者は屢々感歎的な強調で報告している。「この皇太子妃のお言葉は、奥方にとって何という毒薬であつたらう！ 既に彼女の心を捉えているこの人が、彼女への恋を世間にかくし、しかも彼女のために、王位への望みさえ、ないがしろにしていることを、疑いようもない方法で知って、……。」(p. 73)

この噂話の効果は、間接的表現とその解説の間には見られない強いもので、そこだけを浮彫にしたように鮮かな印象を形ずくる。第三に、以上のことの傍証として、作中人物としては、最も意味のない絹職人のひと言が直接話法におかれていることも注目に価するだろう。その内容が、ヌムール公らしい人物の消息であり、奥方に異様な重い印象を与えたからである。「—それは世にも姿のよい男の方でして、働いて食べねばならんような御様子ではないのですが。こちらに來られる時も、いつも家や庭を眺めておられるばかりで、仕事をしておられるのを見たこともありません。」(p. 182)

これらのことから、直接話法の部分は、明らかに一つの特長な機能を果しており、それは他の部分に見られる言葉の音や形の軽視と全く逆のものであると言える。奥方のきく公の噂は、その音声の1つ1つが心に残るほど、重い意味を持っていると考えることもできよう。表現しようと

してなされたのでない行為、屢々否定形でしか示し得ない行為の噂、しかもそのどれもが自分へ恋を指向しているという形で、真実は奥方にメッセージされる。paraître≠véritéのこの宮廷の世界では、一見不確かな人づての言葉をさまざまに編みあげることによって、彼女はそこに真実を浮上らせてゆく。それが真実であるという証明は、誰に向っても表現されていない否定の事実を重ねるという点にしかないのである。まさしくこの恋は、噂による恋だと言ってもよいであろう。奥方は噂による以外、公の恋が真実であると知る術を殆んど持たない。公が犠牲にした多くのことは、すべて噂の中にしか実在しなかったとも言えるのである。

結論

以上、この小説において、直接話法に負わされた独特な機能を検討した後に、parole に対する1つの考え方が、テキストの各段階を通じて、はっきりと浮かび上がるように思われる。ひと言で大きくまとめて言うなら、人間相互の会話は真実を伝え得ないということであろう。慟くとも人が意図して何かを表現しようとする時、そこには余りに多くの飾りと偽りが表面を被ってしまって正確なメッセージを送り合うことができないのである。

この原理の、テキストでの最初の現われは、第1章で見たように、交信に用いられた1つ1つの語とか音の極度の軽視である。parole が余りに装飾的に用いられる世界では、言葉の言われた形をそのまま忠実に写す必要は、当然みとめ難いであろう。そこから間接話法に比べて、直接話法が著しく少いことが、まず理解できた。われわれは次いで、こうした会話の観念にも拘らず、直接話法が用いられた箇所には、やはりそれなりの理由が見出される筈だと考えた。そこにも同じ原理が見つけ出されたであろうか？

直接話法についての着目の第一は、女主人公の発信が著しく少いこと、受信がその大部分を占めること、であった。このことから、言われた言葉よりも、言われない言葉の中にこそ、深い意味があるという公準を想定したが、これもまた表現しようとして述べられた言葉への深い不信を裏づけるものと言えるだろう。これに附随して、とどめようとしても抑え得なかった言葉、あらゆる否定をかいくぐって迸り出た言葉の重視が見られたが、それも、表現の意図や装飾への不信と、対をなすものである。

第Ⅲ章で、われわれは、このように会話について発見の意図への不信は、作中人物の行動についても言えるのではないかと仮定してみた。そして、女主人公の恋の相手、ヌムール公に、このような否定の行動、行動しないことで恋を示す働き、が目立つことを指摘した。それはまた、直接話法の調査の折、公の話題が多かった理由を説明していると思われた。つまり、公が～をしなかったという情報こそが、女主人公が彼からの恋を知る唯一の証明であり、その情報は、直接話法による第三者の噂（＝表現の意図を持たず齎されるメッセージ）の場合が大変多かったのである。そしてこれもまた、表現しようとして述べられた言葉は信じられないという最初の原理の裏づけとなるものである。

こうして、この小説は、会話についての深い不信感、人間同志の相互理解に対する絶望感を底流

として成立していること、その不信感が、直接話法に与えられた機能を説明することを結論できると思われる。

宮廷というありとあらゆる regards に網の目のようにとりまかれた世界で、その網の目をくぐって、あらゆる不信と否定から生き残って送られてくるメッセージ、という不思議な恋愛の存在が、parole の不信という原則の上に成立しているのである。Jean Rousset は、この小説におけるヌムール公の存在理由を、voyeur 特に覗き見をする人、と規定しているが、確実なメッセージの相手としての「ことば」を信じられない以上、相手の心を知るには、覗き見という手段しか残されない。表現の意図を持たない瞬間を捉えるしかないのである。有名な、夫への告白の盗み聞き、小部屋での盗み見、という2つの甘美な場面は、こうして、「ことば」に対する極度の不信という裏面があってはじめて成立する場面なのである。

以上の如く、この小説の直接話法の機能そのものが、小説全体の「ことば」観、ひいては人間観に由来している。ここに描かれた恋愛観そのものにも関わっていると言える。その意味で、最後に奥方がヌムールの恋の永遠性を信じることができず、また彼女の心の正確なメッセージも、率直に語られた時、相手に伝わるができなかったのは、同一線上にある結末と言えるだろう。

〈註〉

- (1) Jean Fabre, *L'art de l'analyse dans la Princesse de Clèves*, 1970.
- (2) Alain Niderst, *La Princesse de Clèves de Madame de Lafayette*, Nizet, 1977.
- (3) Roger Francillon, *L'oeuvre romanesque de Madame de Lafayette*, Corti, 1973, p. 252.
- (4) N. R. F. (avril 1913), *les Dix romans français que...* (Incidences, pp. 151—58).
- (5) J. Fabre, *op. cit.* p. 7.
- (6) Gérard Genette, *Vraisemblance et motivation*, *Figures* II, pp. 71—99.
- (7) R. Francillon, *op. cit.*
- (8) Michel Butor, *Sur《la Princesse de Clèves》*, *Répertoire* I, 1960, pp. 74—78.
- (9) Jean Rousset, *Forme et signification*, 1962, p. 17.
- (10) Pierre Malandain, *Ecriture de l'histoire dans《la Princesse de Clèves》*, (*Littérature, déc.* 1979, sémiotique du roman, pp. 19—36.
- (11) 《《Ses dialogues》...mériteraient une étude plus approfondie que celle à laquelle il faut se limiter ici》(Micheline Cuénin, *Madame de Villedieu*, thèse présentée devant l'université de Paris IV, 1976, p. 683).
- (12) Francillon は、この小説では、間接話法の中に、作中人物が考えたことを伝えたものがあると指摘している (il dit que = il pense que) *op. cit.* p. 222.
われわれは、間接話法に限らず、人物の会話が確に発言されたと想定される部分の間接的表現も、ここに分類した。なお、Bon Usage の定義によると《Discours (style) indirect rapporte les paroles prononcées...indirectement》となっている (p. 1067)。
- (13) C. Delhez-Sarlet *Style indirect libre et point de vue*, Francillon, *op. cit.* p. 223. なお同所に J. Fabre の Style indirect libre 説に対する反論もある。
- (14) P. Malandain, *op. cit.* M. J. Durry, *Le Monologue intérieur dans 《La Princesse de Clèves》*, *Le Littérature narrative d'imagination*, pp. 87—96 参照。
- (15) Francillon, *op. cit.* p. 221.
- (16) *Ibid.* p. 222.
- (17) J. Fabre, *op. cit.*, p. 287.

- (18) J. Rousset, *op. cit.*, p. 20.
- (19) J. Fabre, *op. cit.*, pp. 44—45.
- (20) J. Rousset, *Ibid.*
- (21) 例えば、J. Rousset, *op. cit.*, p. 21.
- (22) Francillon, *op. cit.*, p. 212. また、*Le Roman jusqu' a la Révolution* の中で Henri Coulet も同意見である (Collection U, t. I, p. 258).
- (23) M. Cuenin, *op. cit.*, pp. 683—4.
- (24) Francillon, *Ibid.* p. 219.
- (25) Georges Poulet, *Essais sur le temps humain*, Plon, 1950, t. I, p. 123.
- (26) Francillon, *op. cit.*, p. 212. なおこの意見は Gide に反対したものである。
- (27) Genette, *op. cit.*, p. 75.
- (28) *Ibid.*